

## 今村雅弘復興大臣の来訪

今村雅弘復興大臣が3月13日に経済同友会を訪れ、小林喜光代表幹事および横尾敬介副代表幹事・専務理事と面談した。

今村復興大臣は、「経済同友会の IPPO IPPO NIPPON プロジェクトや宮城県女川町人材の企業研修受け入れ事業などの復興支援に感謝したい」と、経済同友会の復興支援活動に対する謝意を述べた。さらに「震災から7年目を迎えたが、避難者がいまだ10万人を超えている。特に福島県は廃炉の問題もあり、二つの風（風評と風化）にも苦しんでいる」と復興の現状について語った。

その上で、「福島県産の農林水産物には、今も風評が残っている。経済同友会の会員所属企業等には、積極的な福島産品の購入・使用や、被災地への観光の促進をお願いしたい」「福島県等への企業立地を促進するための手厚い支援制度があることを周知していただき、被災地への企業立地の検討をお願いしたい」と具体的な活動支援を求めた。

これに対し小林代表幹事は、「震災復興の議論は続けており、われわれの中では震災は風化していない。今後は地方創生という位置付けで、産官学で東北のベンチャー企業と連携した取り組みができないか検討を進めている」「風評被害の払拭は簡単ではないが、正確な情報をいかに広く理解してもらうか、引き続き周知活動に協力していきたい」と応えた。



経済同友会を訪れた今村雅弘復興大臣(左)

## 女川町追悼式への出席

経済同友会では、NPO アスヘノキボウと連携した宮城県女川町人材の企業研修受け入れ事業を2013年度より実施してきた。震災から6年が経過する2017年3月11日、経済同友会から横尾敬介副代表幹事・専務理事以下15人が女川町主催の追悼式に列席した。追悼式では須田善明女川町長が「人生を無情にも奪われた方々の無念に応え、報いるよう、前を向ける人から立ち上がり、答えのない道を切り開きながら歩んできた」「たとえじけることがあっても再び前を向き、亡くなられた方々が過すはずであった未来の分まで精いっぱい生きることを、ここに誓います」と式辞を述べた。ご遺族の言葉に続き、2時46分には黙とうがさげられた。

式終了後には、会場を移して須田町長との意見交換が行われた。須田町長は「追悼式でのご遺族の言葉にもあったように、震災への向き合い方にはそれぞれのペースがある。まだわれわれも震災の中から立ち直りきれていないが、復興に向けて取り組んだこの6年間はわれわれの財産でもある。経済同友会とのご縁をいただき、役場の人材を経済同友会会員所属企業の研修に受け入れていただいた。彼らにとって、たくさんの気付きや学びがあり、あらためて人づくりの重要性を感じている。人材がすべてなので、ぜひともこの取り組みを今後も継続していただきたい」と述べた。受け入れ企業の担当者からは、「女川町の若い方々の『自分たちで町を変えていきたい』という熱い思いに、われわれも大きな刺激を受けた。ずっと社内にいると分からないようなことにも気付くことができ、交流することの大切さをあらためて学んだ」と、企業側にとっても研修受け入れに効果があることが報告された。



須田善明女川町長との意見交換会

女川町主催の追悼式